

引用文献

- 1) 日本透析医学会 (2011) . 図説 わが国の慢性透析療法の現況. (社)日本透析医学会. P3. <http://docs.jsdt.or.jp/overview/index.html>
- 2) 日本透析医学会 (2010) . 図説 わが国の慢性透析療法の現況. (社)日本透析医学会. P39. <http://docs.jsdt.or.jp/overview/index.html>
- 3) 石田千絵 (2012) . 第4章 災害時の看護活動の実際. C透析患者. 小原真理子. 酒井明子. 災害看護 2 版. 南山堂. P 190-191.
- 4) 大平整爾 (1995) . 透析の拒否・継続・中止. 高齢者の透析. 日本メディカルセンター. P212-221.
- 5) 赤塚東司雄 (2010) . 透析医療と災害. 平成 23 年度透析療法従事職員研修. 日本腎臓財団. P247-251.
- 6) 赤塚東司雄 (2008) . 透析室の災害対策マニュアル. MC メディカ出版. P20-24.
- 7) 同上書 P40
- 8) 長尾尋智 (2011) . 東日本大震災での活動報告 東日本大震災災害支援活動報告. 日本腎不全看護学会誌. 13(2)P91-96.
- 9) 山本ひろ子 (2011) . 東日本大震災での活動報告 東日本大震災における透析看護ボランティア活動報告. 日本腎不全看護学会誌. 13(2)P97-100.
- 10) 前掲書 1) P7
- 11) 森田夏実 (2008) . 血液透析療法を受けながら生活している慢性腎不全患者の“気持ち”の構造. 聖路加看護学会誌. 12(2)P1-13.
- 12) 国民衛生の動向 (2010/2011) . 厚生統計協会. P161-164.
- 13) 愛知県腎臓病患者連絡協議会 (2008) . 全腎協の歴史と透析の社会保障制度 組織強化http://www7a.biglobe.ne.jp/~aijinkyu/images/iryo_sosiki.pdf
- 14) 前掲書 12) P11
- 15) 同上書 P12
- 16) 同上書 P7
- 17) 同上書 P4
- 18) 稲田扇, 西村周三, 松島宗弘, 清野裕, 津田謹輔 (2007) . 人工透析の直接医療費と QOL に関する研究. 糖尿病. 50(1)P1-8.

- 19) 栗山 (2010) . 糖尿病性腎症患者の透析. 平成 23 年度透析療法従事職員研修. 日本腎臓財団. P59.
- 20) 同上書 P33
- 21) 東間紘 (1999) . 透析患者の生と死-生と死を分けたものは何か-. 透析ケア. 5 (11) . P1092-1096.
- 22) 前田国見 (1997) . 透析導入を宣告されたところの痛み. 透析ケア. 夏季増刊. P28-31.
- 23) 成田善弘 (1996) . 心と身体 of 精神療法. 金剛出版. P40-43.
- 24) 広瀬寛子 (1999) . 透析患者の生と死の捉え方-がん患者の場合との比較を通して-. 透析ケア. 5 (11) . p 1086-1090.
- 25) 福西勇夫. 菊池道子. 前田国見 (1996) . 透析ケア. 4 (3) . P264-268.
- 26) 宮崎清恵 (1997) . 透析を続けること of ところの痛み (1) . 透析ケア. 夏季増刊. P76-79.
- 27) 広瀬寛子 (1997) . 看護カウンセリング (1) . 透析ケア. 3 (2) . P179-189.
- 28) 前掲書 30)
- 29) 内閣府. 災害時要援護者の避難支援ガイドライン. 旧= 2005 年 新= 2006 年. 2005. http://www.bousai.go.jp/hinan_kentou/060328/hinanguide.pdf
- 30) 石田千絵 (2012) . VI災害看護. 眞船拓子. 杉本正子. 丸山美知子. 西田厚子. 看護師教育のための地域看護概説. ニューヴェルヒロカワ. P 236-245.
- 31) Vanholder R, Borniche D, Claus S, Correa-Rotter R, Crestani R, Ferir MC, Gibney N, Hurtado A, Luyckx VA, Portilla D, Rodriguez S, Sever MS, Vanmassenhove J, Wainstein R. (2011), When the earth trembles in the Americas: the experience of Haiti and Chile 2010., Nephron Clinical Practice. 117(3), P184-197.
- 32) Keene EP (1998) , Phenomenological study of the North Dakota flood experience and its impact on survivors' health., International Journal of Trauma Nursing. 4(3), P79-84.
- 33) Råholm MB, Arman M, Rehnsfeldt A. (2008), The immediate lived experience of the 2004 tsunami disaster by Swedish tourists., Journal of Advanced Nursing. 63(6), P597-606.
- 34) Lafuente CR, Eichaker V, Chee VE, Chapital E. (2007), Post-Katrina provision

- of health care to veterans in a mobile clinic: providers' perspectives., *Journal of the American Academy of Nurse Practitioners.* , 19(8), P383-391.
- 3 5) Coffman S. (1996), Parents' struggles to rebuild family life after Hurricane Andrew., *Issues in Mental Health Nursing.*, 17(4), P353-67.
- 3 6) Hearn A, Deeny P. (2007), The value of support for aid workers in complex emergencies: a phenomenological study., *Disaster management & response.*, 5(2), P28-35.
- 3 7) Chen CH, Chi MT, Huang HM, Sun FK. (2012), Traumatic response experiences: one year after typhoon morakot., *Hu Li Za Zhi. The Journal of nursing*, 59(3), P29-39.
- 3 8) 河原加代子. 石田千絵 (2008) . 災害トリアージ シミュレーション教材. 2008.
- 3 9) 前掲書 1) P28-31.
- 4 0) 石田千絵. 河原加代子. 齊藤正子. 菅野太郎. 久保祐子. 小原真理子 (2012) . 大規模地震災害時の避難透析の実際と必要な判断. *日本災害看護学会誌*. 14 (1) . P 284.
- 4 1) 大久保功子 (2007) . [4]現象学. グレグ美鈴. 麻原きよみ. 横山美江. よくわかる質的研究の進め方・まとめ方. 医歯薬出版株式会社. P106-124.
- 4 2) 竹田青嗣 (1995) . ハイデガー入門. 講談社選書メチエ. P48-112.
- 4 3) 横山美江 (2007) . [1]現象学. グレグ美鈴. 麻原きよみ. 横山美江. よくわかる質的研究の進め方・まとめ方. 医歯薬出版株式会社. P1-9.
- 4 4) 榊原哲也 (2007) . 論集第 25 号. 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室編. P13-22.
- 4 5) Choen MZ, Kahn DL, Steeves RH (2000) 解釈学的現象学による看護研究. 大久保功子訳 (2005) . 日本看護協会出版会. P5.
- 4 6) 家高洋 (2011) . 現象学的看護研究の基礎的考察: 解釈学的人類学を手引きとして. *医療・生命と倫理・社会*. 10. P23-46.
- 4 7) 小阪修平(2002). そうだったのか現代思想. 講談社プラスアルファ文庫. P141-197.
- 4 8) Nancy Burns, Suzan K. Grove(2005). バーンズ&グローブ看護研究入門. 黒田裕子. 中木高夫. 小田正枝. 逸見功監訳 (2007) . エルゼビア・ジャパン. P603-607.
- 4 9) C. T. Beck(1994). Reliability and Validity Issues in Phenomenology, *Western Journal of Nursing Research*, 16(3), P254-267.

- 5 0) L. Pallikkathayil and S. A. Morgan(1991), Phenomenology as a Method for Conducting Clinical Research, Applied Nursing Research, 4(4),P197.
- 5 1) Thomas S. P. & Pollio. H. R. (2002). Listening to Patients. Springer Publishing Company. P1-38.
- 5 2) Pope. C, Mays. N. (1999). QUALITATIVE RESEARCH IN HEALTH CARE. 大滝純司監訳(2000). 質的研究実践ガイド. 医学書院. P24.
- 5 3) Holloway. I, Wheeler. S. (1996). Qualitative Research for Nurses. 野口美和子監訳(2001). ナースのための質的研究入門. 医学書院. P80.
- 5 4) 新村出編 (2008) . 広辞苑 第六版. 岩波書店.
- 5 5) Goo 辞書 (2015) . <http://dictionary.goo.ne.jp/leaf/jn2/147805/m0u/>
- 5 6) 福島智 (2010) . 生きるって人とつながることだ. 素朴社. P6.
- 5 7) 岡映里 (2014) . 境界の町で. リトルモア. P4-5.
- 5 8) 野村美千江. 岡本玲子. 田中美延里他 (2013) . 外部支援保健師が捉えた津波被災地の地域特性 Community as Partner Model を用いた分析(Community Profile of the Tohoku Earthquake, 2011: Affected Areas as Perceived by External PHNs). 四国公衆衛生学会雑誌. (0286-2964)58 巻 1 号 P119-125.
- 5 9) 前掲書 56) P7.
- 6 0) 同上書 P231.
- 6 1) 安克昌 (2001) . 心の傷を癒すということ. 角川書店. P61-95.
- 6 2) National Child Traumatic Stress Network and National Center for PTSD, Psychological First Aid (2006) . Field Operations Guide, 2nd Edition. 兵庫県こころのケアセンター訳 (2011) . 災害時のこころのケア サイコロジカル・ファーストエイド実施の手引き. 医学書院. P154-147.
- 6 3) 齋藤孝 (2012) . 人はなぜ存在するのか. 実業之日本社. P162.
- 6 4) 坂口幸弘 (2010) . 悲嘆学入門-死別の悲しみを学ぶ-. P3.
- 6 5) 橋本望 (2009) . 「悲嘆」概念の変遷に関する一考察 喪失という体験に迫る試み. 東京大学大学院教育学研究科紀要(1342-1050)48 巻 P213-219.
- 6 6) Maslow, A. (1954). Motivation and Personality. 80-106. New York:Harper & Row.

参考文献

- 1) Manen, MV, (1990). Researching Lived Experience. USA. State University of New York Press.
- 2) マイケル・ゲルヴェン (1970). ハイデッガー「存在と時間」. 長谷川西涯訳 (2000). ちくま学芸文庫.
- 3) 竹田青嗣 (1992). 現代思想の冒険. ちくま学芸文庫.
- 4) 竹田青嗣 (1993). はじめての現象学. 海鳥社.
- 5) 竹田青嗣 (2004). 現象学は〈思考の原理〉である. ちくま新書.
- 6) 北川東子 (2002). ハイデッガー 存在のなぞについて考える. NHK 出版.
- 7) 古東哲明 (2002). ハイデッガー存在神秘の哲学. 講談社現代新書.
- 8) 小阪修平 (2002). そうだったのか現代思想. 講談社プラスアルファ文庫.
- 9) 舟島なをみ (2000) 2. 現象学的方法とエスノメソドロジー. 質的研究への挑戦. 医学書院. P53-69.
- 10) 渡邊二郎 (1994). 構造と解釈. ちくま学芸文庫.
- 11) 古田晴彦 (2013). 高校生のための「いのち」の授業. 祥伝社.
- 12) Elisabeth Kübler-Ross., David Kessler. (2005). On Grief and Grieving the Meaning of Grief Through the Five Stages of Loss, 永遠の別れ 悲しみを癒す知恵の書. 上野圭一訳 (2007). 日本教文社.
- 13) 広瀬寛子 (2003). 看護カウンセリング第2版. 医学書院.
- 14) 広瀬寛子 (2011). 悲嘆とグリーフケア. 医学書院.
- 15) 高木慶子 (2011). 悲しんでいい-大災害とグリーフケア-. NHK 出版.
- 16) 高木慶子 (2011). 悲しみの乗り越え方. 角川書店.
- 17) 小此木啓吾 (1979). 対象喪失-悲しむということ-. 中央公論新社.
- 18) 浦光博 (1992). 支えあう人と人-ソーシャル・サポートの社会心理学 (セレクション社会心理学 8). サイエンス社.
- 19) 菅野仁 (2008). 友達幻想-人と人との“つながり”を考える. 筑摩書房.
- 20) 広井良典 (2009). コミュニティを問いなおす-つながり・都市・日本社会の未来-. 筑摩書房.
- 21) 菅野仁 (2003). ジンメル・つながりの哲学. NHK 出版.
- 22) 本田由紀 (2014). 社会を結びなおす-教育・仕事・家族の連携へ. 岩波書店.

- 23) 稲葉陽二 (2011) . ソーシャル・キャピタル入門 孤独から絆へ. 中央公論新社.
- 24) 増田直紀 (2007) . 私たちはどうつながっているのか ネットワークの科学を応用する. 中央公論新社.
- 25) 増田直紀, 今野紀雄 (2006) . 「複雑ネットワーク」とは何か. 講談社.
- 26) 安田雪 (1997) . ネットワーク分析 何が行為を決定するか. 新曜社.
- 27) 安田雪 (2001) . 実践ネットワーク分析 関係を解く理論と技法. 新曜社.
- 28) 西口敏宏 (2007) . 遠距離交際と近所づきあい 成功する組織ネットワーク戦略. NTT 出版.
- 29) Sheldon Cohen, , Lynn G. Underwood, , Benjamin H. Gottlieb. (2000) . Social Support Measurement and Intervention A Guide for Health and Social Scientists.
- 30) ソーシャルサポートの測定と介入. 小杉正太郎, 島津美由紀, 大塚泰正他監訳. (2005) . 川島書店.
- 31) 石鍋仁美 (2013) . 生きるためにつながる. 日本経済新聞出版社.
- 32) 直江清隆, 越智貢 (2012) . 高校倫理からの哲学 災害に向き合う. 岩波書店.
- 33) 辰濃哲郎 (2013) . 海に見える病院 語れなかった「雄勝」の真実. 医薬経済社.
- 34) 斎藤環他 (2011) . 東日本大震災と〈こころ〉のゆくえ. 現代思想9月臨時増刊号第39巻第12号. 青土社.
- 35) 大槻久美子 (2010) . 心のケアのコミュニケーション. 学習の友社.
- 36) 宮地尚子 (2011) . 震災トラウマと復興ストレス. 岩波書店.
- 37) 笹原留似子 (2012) . おもかげ復元師の震災絵日記. ポプラ社.
- 38) 石井光太 (2011) . 遺体 震災、津波の果てに. 新潮社.
- 39) 澤田勝寛 (2005) . 続・病院が大震災から学んだこと 震災から10年. エピック.
- 40) 特別養護老人ホーム赤井江マリンホーム (2014) . 奇跡の脱出-3.11ノマリンホーム-. 社会福祉法人ライフケア赤井江.
- 41) 山村武彦 (2005) . 人は皆「自分だけは死なない」と思っている. 宝島社.
- 42) 内藤秀宗 (1996) . 阪神大震災に学ぶ医療と人の危機管理. はる書房.
- 43) 震災10周年寄稿集発刊委員会 (2005) . 1.17は忘れない それぞれの10年. 神戸新聞総合出版.
- 44) 高尾美香, 大木美奈子 (2013) . 東日本大震災後のアンケート結果から見る透析治療が繋ぐ絆. 旭中央病院医報(0285-9017)35巻 P86-88.

- 4 5) 日本透析医会 (2012). 東日本大震災と透析医療 透析医療者奮闘の記録. 公益社団法人日本透析医会.
- 4 6) 日本透析医学会東日本大震災学術調査ワーキンググループ (2013). 東日本大震災学術調査報告書-災害時透析医療展開への提言-. 一般社団法人日本透析医学会.
- 4 7) 宮城県医師会 (2013). 東日本大震災記録誌-震災を越えて明日へ-. 社団法人宮城県医師会.
- 4 8) 日本看護協会出版会編集部 (2011). ナース発東日本大震災レポート. 日本看護協会出版会.
- 4 9) 石井美恵子 (2013). 幸せをつくる、ナースの私にできること. 廣済堂出版.
- 5 0) 野村美千江. 岡本玲子. 小出恵子 (2013). 外部支援保健師が捉えた津波被災地の健康課題 (Health Concerns in Tsunami-Affected Areas as Perceived by External PHNs in Japan 2011) 四国公衆衛生学会雑誌. (0286-2964) 58巻1号 P126-133.
- 5 1) 大内隆. 井上セツ子. 木村幸生他 (2013). 交流会による被災者のメンタルヘルスの向上 人形劇を用いた意欲喚起を目的として. 日本精神看護学術集会誌. 56巻2号 P157-161.
- 5 2) 河原宣子. 本郷隆浩. 小林奈美 (2014). 家族レジリエンスの概念を用いた研究の動向 我が国の災害看護実践への適用可能性の検討. 家族看護学研究. (1341-8351) 19巻2号 P114-123.
- 5 3) Martin, T. L., & Doka, K. J. (2000). Men don't cry... women do: Transcending gender stereotypes of grief. Philadelphia: Brunner/Mazel.
- 5 4) Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). Stress, appraisal, and coping. New York: Springer Publishing Company. 本明寛. 春木豊. 織田正美監訳 (1991). ストレスの心理学. 実務教育出版.
- 5 5) Rando, T. A. (1993). Treatment of complicated mourning. Champaign, IL: Research Press.
- 5 6) Rando, T. A. (2000). Clinical dimensions of anticipatory mourning: Theory and practice in working with the dying, their loved ones, and their caregivers. Champaign, IL: Research Press.

- 57) Boss, P. (1999). Ambiguous loss: Learning to live with unresolved grief. Cambridge, MA: Harvard University Press. 南山浩二訳 (2005) . 「さよなら」のない別れ 別れのない「さよなら」-あいまいな喪失-. 学文社.
- 58) Stroebe, W., & Stroebe M.S. (1987). Bereavement and health. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- 59) Lindemann(1944). Symptomatology and management of acute grief. American Journal of Psychiatry, 101, 141-148.